

日本西藏學會々報

第 27 号

Report of the Japanese Association for Tibetan
Studies

No. 27 March 31, 1981

昭和56年3月31日 発行

編集発行人 北村 甫

発行所 東京都文京区本駒込 2-28-21

東洋文庫チベット研究室内

日本西藏学会

チベットにおける初期の仏典翻訳形態の実情

——〈新決訳語〉制定以前の翻訳形態の実例——

越 智 淳 仁

チベット仏典翻訳史の研究において、「二巻本訳語釈」*sgra sbyor bam po gñis pa* や「翻訳名義集」*bye brag tu rtogs par byed pa* が研究資料として重要なものである事は既に周知の如くである。

即ち「二巻本訳語釈」を通じては、これまでの翻訳事業の反省の上に立っての〈新決訳語〉*skad gсар bcad* 制定の事情がかなり知られるし、「翻訳名義集」を通じては、〈新決訳語〉の實際を、それもサンスクリット語とチベット語との対訳の上で具体的に把握出来る。したがって、これ等の資料を充分に把握した上で、チベット大蔵経の翻訳仏典に接するならば、「翻訳名義集」以後の〈新決訳語〉による仏典の翻訳形態の実情を如実に知ることが出来るのである。

しかしながら、これ等の資料だけでは「翻訳名義集」以前、即ち〈新決訳語〉制定以前の初期の翻訳形態についての具体的かつ実際的な事柄は、何一つと云ってよい程把握出来ないのである。

近年、敦煌から発見されたチベット文献の中に、かなり特異な翻訳形態を留める古いものが含まれている事が知られる様になって来た。そして、これ等敦煌文献とチ

ベット本土で翻訳された文献とが、翻訳形態の上でどのような関係にあるのかと云う点が急遽研究テーマとして浮かび上がって来たのである。

そこで筆者は〈新決訳語〉制定以前と以後の翻訳形態を知る上での重要な一資料をここに紹介するとともに、この資料を通じて〈新決訳語〉制定以前と以後の翻訳形態の特色の若干を紹介しようとするものである。

今ここで紹介しようとする資料とは、東北目録 No. 2663 と同 No. 統とに含まれているテキストで、これは「*Buddhaguhya* の大日経広釈」として我国ではよく知られているものである。さて、このテキストには〈新決訳語〉で翻訳も決訳もされていないテキスト（東北 No. 2663 fol. 65a⁵~260b⁷ 以下「未校訂本」と呼称）と、15世紀に〈新決訳語〉で校訂し、決訳されたテキスト（東北 No. 2663 fol. 261a¹~351a⁷, 同 No. 統 fol. 1b¹~116a⁷ 以下「校訂本」と呼称）との二本が伝承されておる。その内の「未校訂本」については、何時、誰によって翻訳されたかについての記載は無く、「目録デンカルマ」中にも収録されていない。しかしながら、この「未校訂本」の翻訳形態を「校訂本」のそれと対照したり、

「翻訳名義集」の〈新決訳語〉と対照することによって、この「未校訂本」のテキストが〈新決訳語〉で未だ決訳されていないテキストである事が知られる。この点は「校訂本」の校訂者シュンヌペルも指摘する所であるが、更に「二巻本訳語釈」によれば、〈新決訳語〉が制定された以後は、これ以外の翻訳スタイル、文法規定、翻訳語等では翻訳すべからずと、ティデソンツェン王 khri lde sron brtsan (776-815 A. D.) の勅命が出されている事からも、〈新決訳語〉で未だ決訳されていないこの翻訳テキストとは制定以前に翻訳されたテキストであると見て差し支えないであろう。プトンはこの「未校訂本」のことを「瑜伽タントラの海に入る船」 rnal hbyor rgyud kyi rgya mtshor hjug pahi gru gziñs の中で、ティソンデツェン王 khri sron lde brtsan (754-797 A. D.) が Buddhaguhya をチベットに招請しようとして果さなかったが、その時に Buddhaguhya 自身から「大日経」の注釈書たる「大日経広釈」など密教に関する7部の skt. テキストが王のもとへ届けられ、王はこれ等のテキストをペルツェクなどに翻訳させた。その時、この「大日経広釈」も当時の翻訳官に翻訳させたと云う。

他方「校訂本」については、校訂した細かな事情を同テキストのコロホンによって知ることが出来る。それによると、シュンヌペル gshon nu dpal (1392-1481) がツェタン寺 rtse than で 1461年にこのテキストを校訂している。この校訂に使用した原典は〈新決訳語〉で翻訳されていないテキストで、乱雑、欠文等がある不完全なものであったと云う。事実、我々はこの原典として使用されたテキストを現在実際に見ることが出来るのであるから、シュンヌペルが云う以上に、このテキストの性格を細かく知る事が出来るのである。彼の校訂の仕方はと云うと、かなり特異な方法を用いて校訂している。即ち、〈新決訳語〉で翻訳されていないこの原典を校訂する場合、skt. テキストを参照することなしに行なう。まず注釈書の内容を引用経文と注釈文とに区別し、引用経文については、ペルツェク dpal brtsegs が〈新決訳語〉で翻訳した「大日経」(東北 No. 494)の経文を参照し、〈新決訳語〉にしたがって校訂している。次に注釈文については、〈新決訳語〉にしたがって校訂しているが、その校訂が極めて不徹底である為、同じ言葉でも片方は校定されないままになっていたりで「校訂本」とは云え、かなり欠陥のあるテキストである。したがって、使用する際はこれ等の点に充分注意する必要がある。

以上の様に、「Buddhaguhya の大日経広釈」と云う一テキストに対してのチベット資料としては、〈新決訳語〉制定以前に翻訳されたテキストと、15世紀にシュンヌペ

ルによって〈新決訳語〉にしたがって校訂されたテキストとの両者を現在我々は手にすることが出来るのである。したがって、この両テキストを対照し、これにペルツェク訳「大日経」を対照加味することによって、〈新決訳語〉制定以前と以後の翻訳形態の実情が把握出来るし、その両者の翻訳形態の相異を通じて、制定以前の翻訳形態の実情を如実に把握し得ることが出来るのである。

又、この当時の翻訳事情を物語るものとして、「二巻本訳語釈」には〈新決訳語〉によって翻訳する場合の模範とすべき二つのテキストが挙げられている。その二つとは「法宝雲経」 dharmma dkon mchog sprin と「楞伽経」 lañ kar gségs pa とであり、前者は skt. テキストからのチベット訳テキスト、後者は漢文よりのチベット訳テキストである。この二つの模範テキストが挙げられている事は、とりもなおさず当時のサンスクリット語からの翻訳事情と同様、漢文からの翻訳事情も又、それ以前の翻訳がかなり不備、不統一なものであったことを示している。この辺の事情が敦煌文献中の漢文蔵訳の資料との関連に於て、どの様な関係にあるのかが興味ある研究テーマとして浮び上って来るが、今はこの点には触れない。いずれにしても、当時の翻訳官達がこの両模範テキストを随分利用したであろうことは想像に難くない。

又、「二巻本訳語釈」では〈新決訳語〉制定当時の仏典の翻訳方法を細かく規定している。それに依ると、散文、偈頌のサンスクリット語からチベット語に翻訳する際の、翻訳語の順序、固有名詞の扱い、数詞の扱い或は敬語用法、文法規定等の細かな規定がなされている。又、翻訳語句に関しては、「翻訳名義集」のそれに従うことは勿論である。したがってこれ等細かな規定や語句は、〈新決訳語〉制定以前の翻訳方式への批判に繋がるものでもある。

以下幾つかの翻訳例を挙げて、〈新決訳語〉制定以前と以後の翻訳形態の相違をにらみながら、制定以前の翻訳形態の特色を見て行く事にする。

- 凡例 (A) ペルツェク訳「大日経」経文、東北 No. 494
 (B) シュンヌペル校訂の「大日経広釈校訂本」中の引用経文
 (B釈) 同「大日経広釈校訂本」中の釈文
 (C) 「大日経広釈未校訂本」中の引用経文
 (C釈) 「大日経広釈未校訂本」中の釈文
 (D) 唐・善無畏、一行訳「大毘盧遮那成仏神變加持経」大正 18, No. 848

る。しかし、「未校訂本」中にはこの様な極めて目新しい訳語と、〈新決訳語〉に近い幾つかの訳語が、一つのサンスクリット語の翻訳語として当てられており、当時〈新決訳語〉を制定するに当っては、従来の幾つかの訳語の中から、最も適当と考えられる訳語を一つ選び、それ等を「翻訳名義集」に書きつらねたのである。

以上の考察で、〈新決訳語〉制定当時の事情の一端と、制定以前の翻訳形態の特色の幾つかを見て来た。それに依って、当時の事情の幾分か把握出来たと思う。しかし、ここで扱った資料の範囲は、「大日経広釈住心品」

の一品の範囲内のものであり、今後更に考察を進めることによって、〈新決訳語〉制定以前の翻訳形態の事情がより鮮明となるであろう。

ここでは紙幅の関係上注は割愛した。しかし、山口瑞鳳博士のご研究に負う所多でありました。この研究を進めるに当り、本学の東智学先生には終始ありがたいご教示を賜わり、又学会では羽田野伯猷博士、山口瑞鳳博士から個人的なご教示を賜りました。この紙面を拝借して厚く御礼申し上げます。

Tsoñ kha pa 独自の中観思想について

松本史朗

1. Tsoñ kha pa (1357-1419) は Candrakirti に代表される中観 Prāsaṅgika の哲学を自己の思想的立場としたが、Tsoñ kha pa と Candrakirti の中観思想は全同ではない。Tsoñ kha pa の中観思想には、簡潔に言えば、(i) Candrakirti の中観思想、(ii) Candrakirti から Tsoñ kha pa に至るまでの中観思想家達の創案による教理又は学説、(iii) Tsoñ kha pa の創案による教理又は学説、という三要素があると思われるからである。本稿では、この中の (iii) を「Tsoñ kha pa 独自の中観思想」と呼び、それは何か、またその起源は何か、という二点について考察する。

ではこの二点を解明するためには、如何なる方法によるべきか。Tsoñ kha pa を絶対視する dGe lugs pa の信仰的観点より見れば、Tsoñ kha pa のみが Candrakirti の中観思想を正しく解釈したとされ、そこには Candrakirti と Tsoñ kha pa との間に思想的差異を認める視点は欠落しているから、この様な信仰的観点を今日我々がそのまま受け入れるならば、我々は、(i) Candrakirti の中観思想をも、(iii) Tsoñ kha pa 独自の中観思想をも、解明することはできない。Tsoñ kha pa 独自の中観思想を解明するには、この様な信仰的観点を欠いている点で、dGe lugs pa 以外の学派からなされた様々の Tsoñ kha pa 批判を利用するのが、有効である。即ち、まずそれらの Tsoñ kha pa 批判において Tsoñ kha pa の学説がどのような学説として提示されているかを調べ、次にその学説が実際に Tsoñ kha pa の著作の中に見出されるかどうかを確認し、最後にその学説が Tsoñ kha pa に先行する中観思想家達の著作中に見られないことが確認されたならば、その学説は、Tsoñ kha pa

独自のの中観思想と規定し得るのである。

Tsoñ kha pa 批判を含む多くの文献の内、本稿で利用するのは、Go ram pa bSod nams señ ge (1429-1489) の TS と Śākya mchog ldan (1428-1507) の BN だけであるが、以下この二書について簡単に紹介する。まず BN は、dGe lugs pa の伝承¹⁾によれば、Tsoñ kha pa 批判を含む Śākya mchog ldan の著作中最も重要なものであるが、その冒頭に見られる「何のために〔この論の主題を〕説明するのと言え……チベットに後に現われた偉大な人として知られている人〔=Tsoñ kha pa〕が中観 Prāsaṅgika の特殊な宗として増益したものが、それ〔=Prāsaṅgika〕の宗ではないと示すためであり、」(ka, 2b4-5) という記述は、BN の造論の目的の一つが Tsoñ kha pa の誤解を除くことによって Prāsaṅgika の真の立場を明らかにすることにあることを、示している。従って、Śākya mchog ldan に Candrakirti を批判する意図は全く無いが、その点は、Phywa pa (1109-1169) による Candrakirti 批判が BN において詳しく再批判されていること²⁾によっても、知られる。次に TS は、チベットの中観派の学説を、第一宗「常辺を中であると説くもの」〔=Jo nañ pa の宗〕と第二宗「断辺を中であると説くもの」〔=Tsoñ kha pa の宗〕を第三宗「離辺を中であると説くもの」〔=自派の宗〕という三宗として提示し (ca, 2b3-4ab; 4ab-8a3; 8a3-9a2)、この内の第一宗と第二宗を批判している³⁾ (ca, 9a2-13b4; 13b4-36b1)。TS の優れた特長は、Tsoñ kha pa 及び Jo nañ pa の学説を、簡潔に一つにまとめて前主張 (phyogs sñā ma) として提示する点であり、この点が、Tsoñ kha pa 批判を含む Go ram pa の他の重要な著作⁴⁾よりも TS